

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8202  
京都市左京区田中大塚町49  
075-701-3210

## 振り返ってみれば

### 楽しかった6年間

長尾 真(昭34年卒)



#### 1 選手交代

去る平成15年12月15日をもって、長くてまた短かった6年間の京都大学総長の職を無事辞する事が出来ました。何事も、なる時よりもやめる時のほうが難しいといわれていますが、大型計算機センター長をしたときはスーパーコンピュータを日本一の規模とし学内コンピュータネットワークも日本で最も完備したものとする事が出来たので、4年であまりやめさせてもらいました。研究のうえで

も1960年頃から始めたパターン認識・画像処理研究は郵便番号読取方式や画像処理をフィードバック処理の考え方で高い精度で意味解析できる方式を考案し、顔写真の解析を世界で最も早くやり、航空写真の解析もかなりうまく出来るようにしましたし、また多くの人達が画像処理分野の研究をやるようになりましたので、自分がこれ以上することもないだろうと思つて、1975年頃から徐々にこの分野から撤退しました。そして助手になった時からずっと考え、少しずつやっておりました言語情報処理、機械翻訳の研究に集中するようになり、1980年には日本で始めての実用規模の日英・英日機械翻訳システムを作りましたが、これは日本科学技術情報センター(今日の科学技術振興

機構)で改良しながら今も使ってもらっています。しかし、この分野も少しずつ研究者が増えてきましたので、徐々にその人達に譲つて、1990年頃からは電子図書館の研究開発を行ってきました。そして1994年には階層的概念に基づく目次検索という新しい概念の検索方式をもつマルチメディア電子図書館を作りました。これは世界的にも最も早期の新しい概念のもので、現在京都大学付属図書館で使われています。

このように私はあることを徹底的にやった後は他の人達に譲り、退くということに意を用いてきましたので、今回の総長退任も晴れ晴れとした気持ちで向かえ、自分の前にはまた新しい世界が開けてゆくという期待感を味わっております。次々と譲つてゆくということでは、次に来るべきものは人生で最も難しいこと、すなわちこの世から消えてゆくということでありたいものであります。

#### 2 総長の課題

総長に選出された時には、幾つかのことを心がけました。第一は大学構成員の皆さんの意見を良く聞き、皆さんの理解を得ながら物事を進めてゆくこと、こうして大学構成員それぞれの活力を引き出

し、これを支援してゆくことであります。また健康に留意して毎日精力を充実させて過ごすこと(おかげで病氣もせず、一日も休みませんでした)、そして京都大学の伝統を守りながら時代の転換期に即した形に舵取りをしてゆくことでありました。具体的なテーマとしての最大の課題は、それまで約10年間議論してきてどうしても決められなかった第3キャンパスの場所を大学として決定することでありました。

時代の転換期には何が起こるかわかりません。大きな危険性を孕んでいます。また大きな可能性、チャンスもあるわけであり。そのチャンスを見極めるのも出て来るかどうかは、神のみぞ知るであります。徹底的に考えた上で、これだと決断したら、迷わずにそこに全身全霊を投入することによって達成することが出来るのでしよう。失敗する事も当然ありますから、それは運を天に任すというか、神の加護を信じて進む勇氣あるのみであります。

#### 3 キャンパスの整備など

この機会に6年を振り返つてみようと思います。まず第一に第3キャンパスとして桂御陵坂に約50ヘクタールの場所を決定し、しかもこれを運よく取得する事が出

来しました。平成15年10月には全体の約3分の1の建物が完成し、工学研究科の化学系専攻と電気系専攻が移転し研究活動を開始しました。あと1、2年で次の3分の1の建物が出来上がる予定であり、工学研究科と情報学研究科の移転が全部終わつて桂キャンパスが完成するのは3、4年先になるでしょう。ここにはローム株式会社と船井電機社長の寄附の建物もたつ予定で、これから工事が始まるころであります。さらに隣接地には桂イノベーションパークが建設中で、これが出来上がるといろいろと企業が入つてきて産学協力活動がさらに促進されることになるでしょう。

京都大学は百年の歴史を持っています。それだけに古い建物ばかりで、また非常に狭隘であることから、桂キャンパスのほかに学内のいろんなところに新しい建物をたて、また老朽化した建物の改修をすることにも努力しました。毎日のキャンパス生活を出来るだけ快適に過ごせるようキャンパスを美しくする努力も随分としました。

正門を入つたところにキャフェテラスをもうけたり、全面改修した百周年時計台記念館にはフランス料理のレストランをもうけたりし、いずれも大変好評を博してお

ります。校舎のトイレを全面的に改修したり、学生活動のクラブハウスを改築・改修したり、グラウンドを整備することにも意を用いました。

#### 4 新しい組織の展開など

大学内の新しい組織としては、情報学研究科、アジアアフリカ地域研究研究科、生命科学研究科、地域環境学学舎・学舎、医療技術短期大学の廃止と医学部保健学科の新設、その他が出来ましたが、特に全国的に見てユニークなものとしては、学内措置で京都大学大学文書館と総合博物館を作ったこと

目に見えないところでは、国際交流にもいろいろと意を用いてきましたし、上海復旦大学の中に京都大学上海センターを設けましたし、その他世界各国に拠点を設け始めております。カリフォルニア大学とは実時間の授業交換を5年前から行っており、学生に大変好評です。また社会に開かれた京都大学ということで、産学協力や京

都府、京都市などへの地域貢献にも力を注いできましたし、滋賀県の膳所高校には高大連携の口座を開設し、意欲的な高校生に京都大学の先生方が講義を下さっております。文部科学省が平成14年度から始めた21世紀COE (Center of Excellence) という競争的資金のプロジェクトには初年度東京大学よりも多くの予算を獲得することが出来ました。

特に私にとつてうれしかったことは、21世紀の世界に貢献する京都大学の理念をしっかりと定めることが出来たこととあります。そこでは基本的な概念として「地球社会の調和ある共存」という概念を打ち出しております。人間社会だけでなく、動植物社会や地球環境を含む地球全体を地球社会と捉え、これが調和を保ちながら共存することを目標において、京都大学のあらゆる教育研究活動をするということとあります。20世紀は

進歩発展という概念で進んできましたが、21世紀はそのような単純な能天気な概念ではやって行けない時代となっているという認識に立ち、「調和ある共存」ということを考え方の中心に置かねばならないということとあります。

#### 5 国立大学協会会長として

さて、学外では、国立大学を国

から切り離して独立させようという国立大学の法人化が政治問題として取り上げられ始めたのが、ちょうど私が総長になった頃でありました。これが1998年有馬文部大臣のときに本格的な政治スケジュールに乗ることになりました。

これは明治の初めに日本に大学が創設され、敗戦後新制大学となつて以来の根本的な大学制度の変革ということと、国立大学協会は忙しとなりました。最初はちょうど私が委員長をしていた第1常置委員会がこれを取り扱いましたが、その後(国立大学の)設置形態検討特別委員会を作り委員長、そして国立大学協会副会長、会長として、国立大学法人法が設立するところまでずっと国立大学側の中心にいて苦労しました。その間に唐突に国立大学の統合問題も出てきました。特に平成13年4月から15年6月までの2年2ヶ月の会長時代は国立大学法人法の細部までの全てについて文部科学省と駆け引きをしなければならなかったときで、気が抜けませんでした。

98ある国立大学も旧帝大のような大きなところと、単科大学や地方にある小さな大学などでは、物の考え方、利害が必ずしも一致せず、国立大学協会として共通点を見出し、結束して政治的圧力に対抗するということは大変難しかつ

たわけです。しかし、国立大学協会会長としては勿論のこと、京都大学総長として、また個人的にも、文部科学省に対してはかなりの圧力をかけ、曲がりなりにもこちらの考え方に近いところを持つてくれたのではないかと思っております。その結果、去る平成15年7月9日に国会を通過した国立大学法人法は、我々から見ても幾つかの問題点があるにはありますが、運用次第では国立大学がより良い方向に発展してゆける枠組みに出来たことは間違いありません。ただ、これからは競争原理がいろいろな形で国立大学の活動に導入され、成果主義の立場から外部評価が行われることになり、これについては評価委員会や社会一般の学術文化に対する認識の在り様を考えると、ある種の危惧を感じざるをえません。いずれにしても、平成16年4月から発足する各国立大学法人はそれぞれの大学の自己努力によって発展して行くことが期待されているなかで、京都大学はより一層の努力をしなければなりません。

といったことで、私としては大変充実した6年間を過ごすことが出来ました。これはひとえに京都大学構成員の皆さんの支えがあったり、感謝してしております。

### 教室だより

#### 平成15年度電気電子工学系 進学・就職状況

- 電気電子工学科長 中村 行宏
- 電気工学専攻長 引原 隆士
- 電子工学専攻長 橘 邦英

平成15年度は、学科長、2専攻長および情報学研究科の特に通信情報システムについては 富田眞治専攻長がお世話させて頂きました。本年度は、電気系2専攻の桂キャンパスへの移転、および電気系大学院の試験日程の8月上旬への繰り上げなど学生を取り巻く状況が日々変わったため、学部学生については吉田キャンパスで移転されない中村学科長が、各専攻についてはそれぞれの専攻長が中心に行うという形を取らせて頂きました。これは、8月をもって従来の電気系教室事務室が廃止されることを踏まえ、学科長、専攻長が責任を持ってそれぞれの学生に目の届いた指導をするためでした。洛友会関係各位には、教室の体制の変化でかなりのご迷惑をかけたことと存じます。ご協力ありがとうございました。

平成15年度は、電気系への求人は四百社以上、従来どおり依頼を頂きました。年度当初の状況に比

平成15年度卒業生進学就職状況

工学研究科(電気工学、電子工学)、情報学研究科(通信情報、知能情報、システム科学専攻) エネルギー科学研究科(エネルギー社会・環境科学、エネルギー基礎科学、エネルギー応用科学)、電気電子工学科

修了、卒業者数	修士	学部	進学・就職先
進 学	7		京都大学博士課程工学研究科電気系
	6		京都大学博士課程情報学研究科
	3		京都大学博士課程エネルギー科学研究科
		55	京都大学修士課程工学研究科電気系
		42	京都大学修士課程情報学研究科
		12	京都大学修士課程エネルギー科学研究科
		3	東京大学修士課程
	1	その他	
計	16	113	
官 公 庁 等	2	1	特許庁、国土交通省
電 気 関 連	67	7	オンキヨー、キーエンス、キヤノン、三洋電機、住友電工、ソニー、デンソー、東芝、日本IBM、パイオニア、日立製作所、富士通、古河電工、松下電器産業、三菱電機、ルネサンス・テクノロジー、ローム、シャープ、
通 信	15	2	NTTデータ、KDDI、NHK、関西テレビ、毎日放送
電 力 ・ ガ ス	9	2	関西電力、中国電力、中部電力、東京電力、大阪ガス
機 械 ・ 自 動 車	17	3	旭化成、オムロン、京セラ、富士フィルム、トヨタ自動車、デンソー、本田技研、堀場製作所、三菱重工、村田製作所
鉄 道	2	1	西日本旅客鉄道、東海旅客鉄道
金 融 ・ 商 社 等		1	日本生命
未 定 ・ 研 究 生 ・ 帰 国	4	2	
計	116	19	

べ就職活動が進む中で、景気の上向きの状況が進み、就職活動にとつては追い風となったようです。学部生、院生が期待されて採用に至っております。これらの学生が社会の要請にこたえる実力を示してくれることを期待しております。しかしながら、電気電子関係の企業のリストラや再編は、卒業生ではなく大学受験生に影響を与えており、これが何年か後に卒業生の資質の問題としてはねかえって来ることを意識しておいて頂く

必要があると思います。さて、本年度の求人の特徴を二三述べさせていただきます。その特徴のひとつに、昨年度来進められた企業の分社化および合併により、従来多く見られた特定の総合電機メーカーへの就職という方式が大きく変化したことが上げられます。分社化のため個別の会社でのマッチングを求める企業も増える一方、人事を別会社にして一括して採用を行うという形も増えました。このように、企業の

形態の変化が就職活動に大きく影響を与えております。次に、推薦制から自由応募への推移も進みました。推薦と自由応募の両方の枠を持つ企業では、推薦を得るにしてもインターネット上のページで登録して、自由応募と同様のエントリーのプロセスを踏んだ後、セミナーに参加を求め、その後大学での推薦を求めるという形を取るといった方法が取られておりました。このような傾向は今後益々進むものと思われれます。本年度に関しては、本学への求人は推薦か自由化を明確にしていたことで、基本的に推薦枠を頂いた企業を中心に就職のお世話を致しました。自由応募のみの企業では、最終学年に進級する前既に就職活動を始める要求をしており、教室が就職の指導を始める時期も前倒しする必要があるようです。本年度に関しては、推薦希望者の照会を連休明けに一度行い、採用試験前に企業の採用スケジュールに間に合うようにせざるを得ませんでしたが、今後益々自由応募に移行する企業が増えると思いますが、研究・教育の実態に合った適切な方法と時期に収束することが期待されます。

本年度は、頂いた推薦の求人数に対して、学内で一応の枠を設けて推薦を行いました。学生どおしの希望の重なりが少なかつたため、大きな調整は行いませんでした。重なった場合には、本人の強い意志の有る場合には、本人の強い推薦枠を越えて推薦を出させていただきます。これまで電気電子工学科およびその大学院から就職していない企業、長い間就職していない企業からの熱心な求人に対して、学生はやはり旧来の企業およびその関係企業を選ぶことが多く、大学院試験の後も求人頂きましたが、ご希望に添えませんでした。

できるようなって来たということと同時に、特別視はされないということを自覚した行動だと認識されます。本年度の就職の状況を表にまとめておきます。ただし、通信情報システム専攻の就職状況の数には情報学科卒の学生が含まれていることをご了解ください。

京都大学桂キャンパス 電気系研究室見学会参加記

富岡 洋光(平2年卒) 1 はじめに 平成16年3月5日(金)に京都大学桂キャンパス電気系研究室見学会が開催されました。この見学会は、京都大学電気系教室と洛友会関西支部が共催という形で開催され、それに参加する機会を得ましたので、当日の様子をご紹介します。

奥村 浩士先生退官記念パーティーのお知らせ

奥村 浩士教授(電気工学科昭和41年卒)におかれましては、平成16年3月31日付けで定年退官されました。左記の通り退官記念パーティーが行われますので、ご案内いたします。

日時 平成16年5月1日(土)午後5時30分より  
場所 ホテルグランヴィア京都5階「古今の間」  
〒600-8216 京都市下京区烏丸通塩小路下るJR京都駅烏丸中央口  
電話 075-344-8888  
連絡先 〒615-8510 京都市西京区京都大学桂  
京都大学大学院工学研究科電気工学専攻  
電話 075-383-1224  
久門 尚史 (E-mail:hisakado@kuee.kyoto-u.ac.jp)

当日は、午後から吉田キャンパスにて奥村浩士教授、牟田一彌教授の最終講義が開催される関係から、桂キャンパスの見学会は午前9時30分から正午までの開催となりました。

## 2 桂キャンパスの概要

桂キャンパスは、京都市西部の洛西ニュータウンに位置しており、最寄りとなる鉄道駅は、阪急電鉄の桂駅です。桂駅からは、京都市バスと京都交通が定期バスを運行しており、概ね4本/時間の便が確保されています。過密な吉田キャンパスと異なり、周囲は竹林が残る自然豊かな環境で、現在もキャンパスの造成工事が継続されています。なお、吉田キャンパスとの間にはシャトルバスが運行されており、約40分で結ばれています。



平成15年10月から大学院工学研究科「電気系専攻」と「化学系専攻」が吉田キャンパスから桂キャンパス(クラスターA)に移転し、「桂インテックセンター」(クラスターB)とともに、桂キャンパス

にて教育・研究活動を開始しています。桂キャンパスでは、工学研究科の大学院生が勉学し、工学部の大学生は従来と同様に吉田キャンパスにて勉学しています。ただし、学部の講義は3回生までに集中して配置されており、4回生は卒業研究のため桂キャンパスにも勉学しています。また、今後数年をかけて、工学研究科の他の専攻科も桂キャンパスに移転する計画となっています。

電気系研究室は、クラスターAの中にある地上4階地下1階建てのA1棟に移転済みです。地下には共同実験室が、地上階には各研究室の教授室や学生居室および実験室が配置されています。今回は、この電気系研究室と桂インテックセンターの見学を行うことができました。

## 3 見学会当日の様子

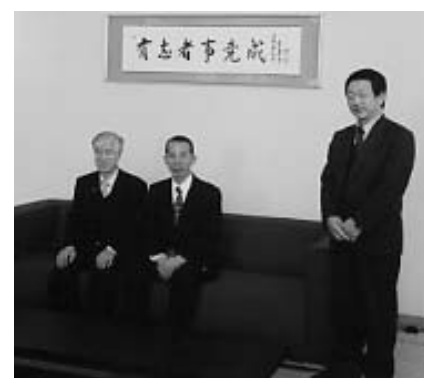
当日は、まだ冷え込みの厳しい折にも関わらず、昭和19年卒業の方を筆頭に、遠くは東京方面からの方も含めて、27人の洛友会会員の参加がありました。中には、同期会を兼ねて参加していただいた学年もありました。また、教室では、電気系すべての研究室において、説明者を配置していただき、参加者からの質問に対応できる体制をとっていただきました。また、クラスターBにある時計塔では、

「洛友会」という電光表示をしていただき、参加者を喜ばせていただきました。

参加者は、午前9時30分にクラスターAの電気系教室棟であるA1棟3フロビーに集合し、引原隆士教授から全体説明を受けた後、各々研究室を訪問し、見学を行いました。

各研究室では、教授自らに研究室の研究概要を解説していただいたり、学生からは自らの製作した実験器具を前に研究の進捗を説明していただくなど、熱心なレクチャーを受けることができました。参加者も熱心に質問する方が多く、各研究室では活発な議論が行われました。その際には、大学の現状について、平成16年4月から独立行政法人化されるなど、キャンパスの移転のみならず、研究環境が大いに变革されつつある状況についても説明していただきました。最近では大学においても、JST(科学技術振興機構)などから研究費を調達して行う研究が主体となりつつあり、定められた期限内に成果を出す必要性が益々求められているという状況が印象に残りました。

当日午前11時からは、長尾真前総長、荒木光彦工学研究科長をお招きし、A1棟3フロビーにて、長尾先生の揮毫「有志者事竟成」の



上掲式が挙行されました。上掲式では、長尾先生自らが、故藤田茂夫教授とのエピソードを交え、「志の有る者は事がついに成る」と、書の意味を解説して下さいました。

上掲式の後には、キャンパス内にある桂インテックセンターを見学しました。ここでは、一つのテーマにつき5年間という期間限定で部門横断的に研究者が集まり研究プロジェクトを形成し、数々の学際的な研究が実施されています。最近クローズアップされているナノテクノロジーの研究プロジェクトでは、電気系と化学系の研究者が共同で研究を行っており、電気工学の新たな展開となっていることを説明していただきました。その際、「電気回路を相手にしていたのが、今は亀の甲(ベンゼン環)とも格闘しています。」と言っておられたのが印象的でした。

## 4 最後に

引原教授をはじめ、お忙しいところ参加者のために時間を割いて案内をしていただきました各研究室の皆さまに紙上をお借りして、お礼申し上げます。

なお、見学会の様子につきましては、洛友会関西支部のホームページでも紹介しております。

(洛友会関西支部ホームページ  
<http://www.kiswebne.jp/rakuyu/>)

## 会員寄稿

### 今世紀のエネルギー

二つについて(II)

前川 則夫(昭36年卒)

1 前回は化石燃料と地球温暖化の関係、温暖化防止に果たす森林の限界などについて解説した。今回は世界のエネルギー需要、生産、主要国の状況について解説する。世界のGDPに占める各国のシェアの大きさは、現在、米国、日本、ドイツの順であるが、2030年にはアジアの躍進で、米国、中国、インド三大経済パワーの順になるとの予測もある。20世紀の先進諸国の人口は約10億人にすぎなかったが、約40億人に拡大する勢いである。先進国はエネルギーの大量消費によって支えられている。エネルギー獲得競争は避けられない。国際間の競争激化の中で日本

を含め世界の先進国が必要とするエネルギーを如何に安定的に確保していくかというのが、地球環境を守る戦いに次ぐ、もう一つの大きな問題であり、本稿では安定確保の問題について出来るだけ具体的に説明して行きたい。

2 (世界のエネルギーの見通し)

①IEAが最近公表した長期予測によると世界のエネルギー需要は、現在、石油換算約90億トン(内訳…石油40%、天然ガス24%、石炭25%、原子力7.6%、水力2.6%)であるが、2030年には現在の1.7倍の153億トンに達し、化石燃料がその90%を占めると予測されている。二酸化炭素の放出量はほっておけば今より70%も増え年間381億トン(現在224億トン)に達する。京都宣言でいう90年比では90%の増加となる。

②また、石油生産量のピークは早くて2010年、遅くとも30年頃と見られている。以降生産が減少して価格が高騰する。石炭への依存は地球環境の観点からは推奨されない。人類は遅かれ早かれ膨大なエネルギー消費を石油から天然ガスにシフトしつつ原子力と再生可能エネルギーに依存するしかない。

③世界の主要国の新しいエネルギー政策の狙いは自給率の向上と安定確保に尽きる。現在の自給率は米国73%、EU53%に対して日本は19%。原油の中東依存率は米国25%、EU51%に対して日本は

87%に達する。

④一次エネルギーの一人当たりの年間消費量(1997年)は米8.1トン、英国3.8トン、日本3.6トン、中国0.7トン、インド0.3トンであるが中国、インドなどの諸国の消費量は急拡大(10倍程度)していくであろう。

3 (急増するアジアの消費)

①そこでアジアを概観すると、IEAの見通しでは、アジア地域(日本を除く)で97年に石油換算18億トンだった消費量は2010年には30億トン、20年には41億トンと爆発的に増加する。中国とインドを中心に、経済成長に伴って産業・運輸・民生部門が増加するためである。

②爆発する需要に対して供給は十分出来るだろうか。既に、80年代に石油輸出であった中国が90年代に輸入国に転じ、急速に中東依存を高めている。将来、中東に大きく依存している日本との取り合いが予想される。

4 (日本のエネルギー需要)

①99年の日本の一次エネルギー消費量は石油換算5.1億トン。その内訳は石油52%、天然ガス12%、石炭17%、原子力13%、水力4%、その他2%であった。国産エネルギーはたったの6%、準国産エネルギーの原子力を加えてやっと19%になるにすぎない。

②日本の一次エネルギーの消費量は1970年に3億2千200万トンだったが、'00年には5億3千

500万トンに増加している。今後は人口の減少(30年には約1000万人)に伴ってエネルギー需要の低下も予想されている。

③日本の部門別のエネルギー消費構造は産業部門が利用効率の改善などから70%から50%に低下、民生及び運輸部門は生活水準の向上、モータリゼーションの発達から過去30年でそれぞれ10ポイントづつ上昇し各4分の1のシェアになっている。

④日本のエネルギー政策は第一次石油危機以降、天然ガスと原子力を積極的に利用して、需要の拡大に対応してきた。その結果、石油の割合は第一次石油危機前の80%から、現在では50%と減少している。

⑤日本にとって大きな課題はエネルギーの安全保障。今後、エネルギー自給率を原子力と再生エネルギーの開発によって向上させ、石油についても輸入の割合が大きい中東依存率(87%)を下げていくことが喫緊の課題となっている。

⑥90年に2億8700万トンだった二酸化炭素(炭素換算)の排出量は'00年には3億1700万トンに増大した。政府は2010年の排出量を京都宣言で約束した90年水準に抑えることを目標にしているが達成することは困難な状況。日本では火力発電所の効率改善が進み、また、産業・民生部門とも省エネの努力が続けられ、GNP当た

りのエネルギー消費量で見ても先進国では極めて低い水準にある。

5 (世界の確認埋蔵量と上位国のシェア)

①石油は1兆500億バレル(サウジ25%、ロシア14%、イラク11%、UAE9%)

②天然ガスは5477兆ft<sup>3</sup>(ロシア32%、イラン15%、カタール7%)、

③石炭は米国25%、ロシア23%、中国12%の順である。

6 (世界の石油生産量)

①01年時点で、世界の石油生産量は約272億バレル(40億トン)である。IAEの見通しでは20年には380億バレル(56億トン)、この間の年平均の伸びは1.6%と見積もられている。生産地別では引き続き中東が36%、OPEC全体で48%を占める。

②究極埋蔵量は5兆バレル(体積で7km程度)が一つの目安。石油工業連盟が可採埋蔵量2兆700億バレル(3050億トン)という数字を出している。また、確認埋蔵量1兆500億バレルを元に計算すると採掘可能な年数は40年になる。

7 (米国における課題)

①世界のエネルギー生産量は石油換算約90億トン。米国だけで23億トン、その4分の1を、また、発電電力量の3分の1を消費している。

②米国には石炭が豊富であり、天然ガス生産も過去10年で35%増加

させた結果、現在のエネルギーの自給率は74%である。しかしながら、米国の石油生産量は日量73万バレル(世界シェア11%)に対して輸入量は日量931万バレルに上り、最大産油国サウジアラビアの日量855万バレルを超える。石油については、現在、既に42%に落ち込んでいる自給率が2020年には更に30%迄落ち込むものと予想されている。

③米国は天然ガスの世界最大の消費国だが、これまでは需要を国内のガス田からの供給で賄い、02年のLNGの輸入量は450万トンにすぎなかったが、2025年には9千万トンに達するとの見方もされている。将来は天然ガス(LNG)も輸入に頼らざるをえず、エネルギーの海外依存度は更に高まる。

④米国の軍事力と経済力は世界最大の石油消費に支えられている。米国は世界第二位の産油国であったが、産油量は1970年をピークに減少を始め、可採埋蔵量も10年とサウジアラビアの80年強に比べて極端に少ない。米国の弱点はここにあり、エネルギーの安定確保が米国の安全保障上の最大課題になっている。

⑤現在の電力の燃料構成は石炭52%、原子力20%、天然ガス16%であり温暖化の観点からは石炭の比率が高すぎるという問題を抱えている。このため、水素エネルギーの利用促進や70年代後半から中

止していた新規原子力発電所の建設計画の再開が検討されている。現在、原子力は104基、文字どおり世界のトップクラスの原子力発電国になっている。

8 (EUのエネルギー見直し)

①英国は北海油田を持つ産油国で、エネルギー自給率は120%。豊富な石炭層の上に住むドイツは自給率40%を維持している。化石燃料を持たないフランスは今や総発電電力量の77%が原子力、これがエネルギー自給率を51%に引き上げている。

②EU域内で消費される一次エネルギーは現在、化石燃料で80%、原子力などで20%となっている。また、発電電力量の燃料別内訳は化石燃料50%、原子力等50%で賄っている。EUの一次エネルギーの輸入比率は50%で石油の75%を輸入、天然ガスの40%はロシアからの輸入。

③IEAの見直しによれば20年時点で石油の輸入依存度が90%、天然ガスは70%にそれぞれ高まり、一次エネルギー全体の輸入比率は70%になる。この予測に危機感を持ったEUは、エネルギー安全保障の為に共通政策として、再生エネルギーの開発と原子力の重要性を強調している。

④英国は北海油田の枯渇が進み、2010年にも原油・天然ガスの純輸入国に転落する見込み。20年には同国原発の老朽化のために、

原子力の発電比率は現在の4分の1、即ち5%に下がる見直し。英国の各分野で指導的な立場にある学者達で構成されている英国王立協会は02・2月声明を発表して、CO<sub>2</sub>の放出量が増加しているという事実を踏まえ、既存の原子力発電設備を化石発電設備で置き換えるような政策を導入すべきではないとの見解を発表している。

9 (中国のエネルギー見直し)

①中国は米国に次ぐ世界第二のエネルギー消費国。00年の実績では、石炭は世界最大の生産国で世界の28%を生産(石油換算で66億トン)する。原油の生産量は47億トン/日であり、世界の4%を占めるが、96年には輸入国になり、現在では3割を超える輸入依存度になっている。00年のエネルギー需要のトータル実績は95億トン石油換算となっている。

②今後の需要見直しは2010年には13億トン、30年には21億トン(石油換算)に増加し現在の2.2倍、世界の14%になる。EUの18億トン、インドの10億トンを上回る。内訳は石炭で128億トン、石油で58億トン、天然ガスで15億トン、原子力で0.6億トンとなっている。

③中国は世界第二位の炭酸ガス排出国である。設備の熱効率が悪く、石炭への依存度が高い。98年のWHOの調査では世界十大深刻公害都市に中国の7市が入っている。今後も石炭に極端に依存した電力

需要の拡大やモータリゼーションによる石油消費の急増の影響が予想される。自動車为例にとると自動車の保有台数は現在日本が約7500万台。02年の中国が2000万台。これが中国では10年代に1億台を突破、20年には1.5億台、30年には2億台を超えるといわれている。

④CO<sub>2</sub>の排出量は00年の31億トンから30年には米国・カナダ合計の83億トンに次ぐ67億トンに達する見通しである。自給率の低下が進む中、中国はロシア等と積極的なエネルギー外交を進めている。中国は石油消費量の約3分の1を輸入に頼り、輸入量の半分以上を中東に依存している現状を踏まえ、温首相は「石油と天然ガスは国民経済と国家の安全にかかわる重要な戦略資源」といつている。

10 (ロシアとエネルギー)

①ロシアはエネルギー大国である。世界の天然資源の確認埋蔵量に占めるロシアのシェアは天然ガスが31%(世界1位)、原油14%(世界2位)、石炭16%。ロシアのエネルギー自給率は160%にのぼり、輸出総額の50%強が石油、石炭、天然ガスによる。EUのロシアへの依存度は石油で25%、天然ガスで40%に上る。IEAによると03年・7~9月の実績によれば日量生産量は86万バレルでサウジアラビアの日量を上回っている。

②ブーチン政権はEUへのエネルギー

供給を長期的に保証し、エネルギー分野での米国との戦略的提携に踏み出し、中央アジアやカスピ海における将来の原油生産で協調路線をとっている。米口連合とOPECが石油価格に大きな影響力を持つであろう。日本との関連に触れれば、東シベリア(バイカル湖南端)の石油やサハリン東方沖で進めてきた石油・天然ガス開発事業(サハリン1、2)などロシアとの関係が深まりつつある。

(次号に続く)

「自動車技術の進化と電線」

酒井 和憲 (昭55年院卒)

〈はじめに〉

世界各国の電線会社が私的に設立しているICF (International Cables Federation) の年次会議が昨年10月カナダのバンクーバーで行われました。私は自動車用ワイヤーハーネス(組み電線)の設計を担当していた関係で自動車の最新技術について講演をしましたのでご紹介いたします。自動車の動向をお話すると同時に電線業界への要望を伝えたいとの思いで参加しました。一方、電線業界の方々は、電力や通信網が普及した今、どちらかと言うと縮小側事業であり、今後の伸びが予想される自動車用ネットワークやワイヤーハーネスの動向に関心があるとの事でした。

〈自動車技術の変化と電線への期待〉

最近の自動車は、環境対策や安全性向上を中心に、動力源やセンシング、車外との通信に大きな革新が起こっています。その代表例は、燃料電池、ハイブリッド車等の「新動力」、周辺監視カメラ・レーダー等の「認知技術」、料金課金システムや情報センターとの電話通信によるサービス等の「ネットワーク技術」です。車両の内部の電線にも大きな変化があり、大電力の配電、高速データの授受、各種アンテナによる新しい種類の電線が増えると同時に、電子部品が満載されることで部品を接続するワイヤーハーネスが肥大化しました。例えばカローラでもワイヤーハーネスの質量は15kg・20kgあり、セルシオ等の高級車では40kgを超える質量に達しています。自動車業界全体の電線消費量を銅の重さで表すと年間50万tと推定され、全産業における銅の消費量が100万tと見積もられていることから約5%が自動車用です。車両内ネットワークの活用や電線の細径化で総量増加が抑えられているものの電子装備の普及拡大により今後も伸びが見込まれています。

〈究極のエコカーを目指して〉

自動車に対する世界の環境規制は排気ガスから始まり、リサイクルやCO<sub>2</sub>排出規制と次々と拡大しています。究極のエコカーへの道筋として内燃機関エンジンとモーター

ターを組み合わせた「ハイブリッド車」や「燃料電池車」が登場しています。代表的ハイブリッド車「プリウス」の動作を簡単に言うと「信号等の車両停止時はエンジン・モーターとも停止。走り始めはモーター駆動。スピードが上がってくるとエンジン駆動。加速時はモーターの力を加え、減速時は発電を行ってバッテリーに運動エネルギーを回収。また、バッテリーの充電量が不足してくるとエンジンにより充電」という様にそれぞれの良さを組み合わせています。昨年フルモデルチェンジを行った2代目プリウスでは、モーターの作動電圧を288Vから500Vに引き上げ、更なる効率化を行うことで35.5km/L(国土交通省審査値)と、このクラスの車で世界最高の燃費を達成すると同時に、50kwのモーターをターボチャージャーの様に使って気持ちの良い加速が得られます。急加速を暫く繰り返すと電池の充電量を使い切りエンジンのパワーのみとなってしまうが、「燃費は良いけどあまり走らない車」ではなく、「普段は低燃費の車が良いが、いざと言う時はしっかりと加速したい」というユーザー感覚にも合っていると思います。トヨタでは「HYBRID SYNERGY DRIVE」と呼び、異種技術の融合・相乗効果で新たな世界が開けることを訴求しています。究極のエコカー候補は水素を

用いた燃料電池車です。排出ガスが水蒸気のみと正に究極の動力源ですが、まだまだ燃料電池本体が高価であることや水素の供給インフラ整備に時間がかかることから、世界中で数多くの研究開発が行われているとはいえしばらくの間が掛かると思われます。  
**＜安全で快適な車を目指して＞**  
 もう一つの自動車技術の大きな変化は、安全装備の拡大に沿った周辺監視システムの拡大です。バックする際にナビゲーション画面に後方視界を写し、画面上の表示によってハンドルの操作を教示するバックガイドモニターや、更には進化した電気式パワーステアリングを応用して自動で駐車動作を行うIPA(アイパ・インテリジェントパーキングアシスト)という装備も現れてきました。また、小さな子どもを巻き込むことが無い様、助手席ミラーの下を監視するカメラや、狭い路地から出るときに左右の確認を行う為の車両の先端につけられたカメラなどが実用化されています。最近では障害物を補足し音やシートベルトの動きで警報を発したり、衝突が避けられないと判断するとブレーキをかけたリシートベルトを強く巻き上げて衝突時の危険度を低減する等のリーダー技術を応用した安全装備も拡大の一途です。一方、かなり普及してきたETCや、情報センターと電話で接続して道路情報、音楽配

信、盗難通報するシステムなど電波機器が次々と登場してきました。  
**＜自動車業界と電線業界の交流＞**  
 以上の2つを電線から見ると、車のパワーがだんだん電力に移行していき、パワーケーブルの低コスト化やアルミ化等の軽量化が期待されることと、カメラ・レーダー等のセンサーや各種アンテナの増加に伴って高周波ケーブルやデータ通信ケーブルが増えワイヤーハーネスの作り方も変わってきます。車の中でエネルギーと情報をいかに伝えるかと言うところに軸足が移っていくと思われるます。プリウスのハイブリッドシナジードライブを引用して、電線への私の期待を込めてHYBRID SYNERGY OF INDUSTRIES: ALL OVER THE WORLDという言葉で講演を締めくくりました。

**白銀の峰々と迫力の氷河、そして麓に広がる牧草地**  
 — スイス(Ⅱ)

1998.8.30~9.8  
 柴田 研司(平4年卒)

5日目(9月3日) 残念ながら、朝から雨が降っている。ツエルマツトからテッシュまで電車、その後バスに乗り換えインターラーケンに向かう。途中、ゴッペンスタインからカandelシュテークまでカートレインに乗車。まるで、貨物になった気分である。

インターラーケンに着いたころ、すっかり空も晴れユングフラウも見えてくる。爽やかな気分にひたる。メインストリートを散策した後、昼食をとりグリンデルワルトへ向かう。

「サンスターホテル」にチェックインした後、散策する。現地の元気な子供達に出会いいっそう楽しい気分になる。土産物の店が並びメインストリートは、多くの観光客で賑わっている。夕食はスイスの郷土料理、ミートフォンデュ。サイコロ状の牛肉を串にさして揚げソースや薬味をつけて食べる料理だが、予想以上にさっぱりしていて食べやすい。ソースと薬味もそれぞれおいしくて感激する。

その後、ホテルの部屋のベランダで黄昏時にお楽しみ：目の前にそびえるアイガー、メンヒ、ユングフラウを眺めながらスイスワインを飲み、チーズをつまむ。スイスを満喫しているという充実感に包まれることこの上ない。

やがて、空が暗くなり山々が黒い塊となって闇に消える。なんて時間がゆっくり流れるのだろう...

6日目(9月4日) 早朝、本当にさわやかな目覚めだ。空は快晴、それも雲ひとつない。大感激。ベランダに出て山々を眺める。まさしく太陽が昇ろうとしている時：朝焼けに染まるグリンデルワルトの空、清々しい空気が、目の前に広がる牧草地と徐々に明るくなっていく山々の景色。気持ちが高まっていくばかりだ。ユングフラウ山頂のリアルタイム映像をテレビで見ることができ、そちらもすばらしい。すっかり景色に見とれてしまった。

朝食を終え、ユングフラウヨツホに出発。標高3454mのヨロツパで一番高い駅まで登山鉄道で行く。途中のクライネ・シャイデックまでは滝や谷底、三山のパノラマが楽しめるが、ここで鉄道を乗り換えてからは全長7122mのトンネルに入る。途中ふたつの駅でそれぞれ5分停車して、外の景色を見ることが出来る。ガラス窓越しに氷雪を見て麓との違いに驚く。目の前に横たわる巨大な氷河はすごい迫力だ。

終点のユングラヨツホ駅は地下駅になっていて、下車すると同時に冷気に包まれる。「スフィンクス展望台」のテラスからはまばゆい銀世界が広がっている。バルコニーにも出てみる。快晴の空と自銀の雪原、さんさんと降り注ぐ太陽の光、外は意外にも暑い。天候に恵まれたことに感謝せずにはいられない気持ちになる。

「氷の宮殿」「プラトリー展望台」予想以上に広くて驚く。踏み固められた雪原を少し歩いてみる。有名な(?)日本向け専用の「赤いポスト」から自分たち宛に葉書を出した。これも貴重な記念品だ。帰りはアイガージェッチャー駅

で下車し、クライネ・シャイデツクまでハイキングする。あちこちで牛がカウベルを鳴らし草を食べている。のどかな風景が広がる。目の前には氷河。眺めの良いところで手作りサンドイッチを食べる。雄大な景色の中で昼食は格別だ。デザートのりんごもとてもおいしい。と、その時「バリバリバリッ」と雷のような勇ましい音が響いた。氷河が崩れ落ちる音だ。目の前で起こる自然界の大迫力に圧倒される。

行き違う人々と挨拶を交わしながら楽しく歩くが、途中から雲行きが怪しくなってくる。山の天気は変わりやすい。さつきまであんなに晴れていたのに。振り返ると山々の頂上は雲に覆われてしまっていた。しかし運良く雨に降られることもなく、クライネ・シャイデツクに到着したころには、また青空が広がっていた。

クライネ・シャデツクからのベルナー・オーラント三山の眺めもまたすばらしく多くの観光客で賑わっている。アルペンホルンを抱えたお兄さんを見つけ、近づいていくと演奏してくれた。スイスらしい柔らかく優しい音が響きわたる。本場でアルペンホルンの生演奏を聞けるなんて感激である。もう少しハイキングを楽しもうかとも思ったが、空模様も心配だったので列車でグリンデルワルトまで戻ることにした。

夕食はぜひ食べてみたかったラクレットに決定。昨日に引き続きスイス料理である。メインストリート沿いの可愛い雰囲気のレストランで食する。

夕暮れ時はやはりホテルにベランダから景色を眺める。明日はこの景色ともお別れである。

7日目(9月5日)目覚めると外は雨。雨に濡れるスイスの景色も美しくて個人的には好きなのだ。やはり残念だ。

グリンデルワルトからバスでインターレーケンを経由してプリエンツトに向かう。木彫りで有名な湖畔の静かな町。人気のロートホルン鉄道に乗る。スイスで唯一定期運行している赤い車体がかわい蒸気機関車だ。楽しみにしていたのに雨のため、視界ゼロである。頂上(2244m)は寒く、霧がかかっている。約1時間後、下りる。そのころになるとようやく空が明るくなってきて、SLの窓からプリエンツ湖を見ることができた。ブルーエメラルドグリーンのなんとも言えない美しさだ。

昼食を湖畔のレストランで食べ、バスで移動。右手にトゥーン湖を見ながらスイスの首都・ベルンを経由しレマン湖へ。バイロンの叙情詩『シヨンの四人』で有名なシヨン城に到着。フランスの山々をバックに、湖に突き出た岩場の上に建てられていて、遠くからだとまるで湖に浮かんでいるよ

うに見える城だ。レマン湖沿いを少し歩いてみる。曇り空が気になるが、心地良い。

再びバスに乗りマルティニを経由し国境を超え、フランスのシャモニーへ入る。アルプスの名峰モンブラン(4807m)の麓の町である。山々の懐深く抱かれた町だからか、今まで見てきたスイスの町並みと比べ華やかさに欠ける気がするが、とにかく明日の『エギーユ・デュ・ミデイ』が楽しみである。『ホテルダザグロン』に宿泊。

8日目(9月6日)朝、目覚めると真つ先にベランダから空を見上げる。快晴！嬉しい。

朝食の後すぐにロープウェイ乗場に向かう。昨夜、山頂は雪が降ったそう。早朝からロープウェイはストップしていたらしい。乗場は多くの観光客で混雑している。

シャモニー(1037m)からプラン・ド・レギーユ(2308m)まで8分、乗り換えてエギーユ・デュ・ミデイ(3842m)まで10分、驚きの速さである。ほとんど垂直に引つ張り上げられるような感じで、あつという間に到着。

頂上テラスへ行く。この一番高い展望台からの眺めが素晴らしい。360度大パノラマが広がる。快晴の青空、一面白銀の世界、くつきりと見える4000m級の峰々、ヨーロッパ大陸の最高峰モンブラン(4807m)が手の届

きそうな近さに思える。エギーユ・デュ・グーテもグランド・ジョラスもすべて見え、大感動だ。空気と風の冷たさも太陽の眩しさも大パノラマの一部となり、心の奥底に刻み込まれた。

ロープウェイでシャモニーまで降り、レストランで昼食をとった後、町の散策をする。日曜日ということもあって閉まっている店も多いが、広場で憩いでいる人達や教会などの建物、そして氷河が溶けて流れてくる川のながれを見ながら歩くのもまたいいものだ。

少しのんびりした後ジュネーブに向かう。バスで国境を超え、スイスへ。ジュネーブは今まで旅してきたスイスのイメージと決して重ならない都市。都会的である。国連機関の建物や宗教改革記念碑、花時計、サン・ピエール大聖堂などを見る。花時計のあるイギリス公園は、多くの人で賑わっている。私達も心地良い涼しい風に頬を撫でられながらレマン湖畔を散歩した。ブルーの湖面に白いヨットが何隻も出ている。対岸のフランス側には午前中に近くで見えた山々が雄大なパノラマを見せている。夏の風物詩である大噴水も絶好調！青と白と緑のコントラストが見事だ。

ジュネーブの黄昏時の町並みを見ながら夕食を食べ、シャモニーに戻る。いよいよ旅行も最終である。

9日目(9月7日)・10日目(9月8日)シャモニーからジュネーブ空港へ。国内線で約1時間、チューリッヒへ到着。スイス航空SR162便(13時10分発)で日本へ。翌朝、素敵な思い出と共に関西空港に到着。旅で出会ったすべてのもに感謝、感謝。

**同窓会だより**

**卒業50周年同窓会**

昭和28年新制卒業生は、平成15年11月6日、7日の2日に亘り京都にて、同窓会、見学会を開催した。今回の参加者は39名で、物故者5名を除く現在員55名の約70%のご出席が得られた。

**50年ぶりに電気教室に集合**

第1日目の11月6日13時、電気教室旧玄関前に集合。電気N館4階 第1教室で久しぶりの顔合わせである。中には50年ぶりの顔合わせで顔と名前が一致しない方も有り、失礼にならないようにやり取りをしている内に、声色から名前を思い出すことも有る次第。少々の時間が経過すると、とたんに堰をきったかのように話が弾む。同窓生とは、本当に良いものであると実感が込み上げてくる。本日予定した見学プランを幹事より説明し、京都大学総合博物館、総合人間学部キャンパスなどを見

(完)





学した。  
 知の殿堂 京都大学総合博物館を見学  
 京都大学総合博物館は、東大路通り沿いに2001年6月1日に完成。  
 京大の博物館の歴史はけっこう古くて、1914年に文科大学(いまの文学部)付属の陳列館が設けられたことに端を発している。既に89年の歴史を刻んできたことになる。平成8年に、当事の文部省の学術審議会の「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」の答申に基づいて京大ほか6大学に大学博物館が設置されたのである。京都大学総合博物館に

は、霊長類学や生態学、古生物学、植物分類学など、多彩な研究資料約250万点が所蔵されており、正に蓄積された知の殿堂と言える。カンフォーラ(楠)でティータイム  
 大学のシンボルである時計台は、大学創立百周年を記念して「時計台記念館」に改装工事中でした。正面の楠の名に因んで付けられた洒落たレストラン『カンフォーラ』で、散策の疲れを癒し、16時30分迎えのバスで同窓会会場へ。  
 同窓会懇親パーティ  
 同窓会は、教室より近藤文治先生をお迎えし、京都洛北、高野川のほとりに立つシテイリゾート感覚のアピカルイン京都で挙行。会を始めるに当たり、若くして亡くなられた安芸修(旧姓 阿部)、片山昭治、片山敏夫、京本義章(昭29)、船越利昭(昭29)各位のご冥福を祈り黙祷を捧げた。引き続き同窓生を代表して井上誠一君より挨拶をして頂き、いよいよメインイベントである卒業50周年の同窓会となる。  
 しばし団欒の後、近藤文治先生よりご挨拶を頂きました。  
 先生は、(財)応用科学研究所理事長、(財)近畿地方発明センター理事長、さらには洛友会会長などなどの要職に就かれ週休3日制で打ち込んでおられるという多忙

さ。余生は、人に奉仕する、大きな仕事を残しているとも仰っておられました。正に前向きな気迫に同窓生一同感服した次第。我々の10年後は近藤先生のように在りたものと思った次第でした。  
 いよいよ桂キャンパスへ  
 翌11月7日8時40分アピカルイン京都発、途中金閣寺を拝観し、一路 京都大学桂キャンパスへと向った。  
 ここでは、クラスターAゾーンの総合研究棟(Ⅱ)(電気系)を見学した。設備も整い、いよいよこれからと言う雰囲気案内の先生から伺った。さらにクラスターBゾーンへ進み、桂インテックセンターを見学した。ここは、専攻の枠組を越えて、夫々の英知を結集融合し、学際的な応用研究課題に取組み、世界を先導し、新しい技術を創出すると言うコンセプトのもと、5つのオーブンラボと高等研究院で構成されている。  
 新しい技術開発に対する京都大学の研究体制、設備の充実を目の当たりにし、桂キャンパスの見学は有益であった。  
 最後に趣きを変えて平等院へ  
 平等院鳳凰堂には、菩薩が天空を舞う阿弥陀の極楽浄土が再現されている。彼岸の中日には朝日が阿弥陀の正面から昇り、夕日がその背後へと沈んでいくという。そ

の先には、西方極楽浄土が広がっていると信じられている。  
 我々一同、来世の幸福を祈りつつ、また再会の機会を願いつつ、平成15年11月6日、7日の2日間に亘る同窓会ツアーの最終点であるJR京都駅に向った。  
 西組 野口 透(昭28年卒)  
 東組 近藤 貞吉(昭28年卒)  
**卒業40周年記念同窓会開催**  
 秋たけなわの平成15年11月22、23両日 昭和38年卒業生が「卒業40周年記念同窓会」を開いた。  
 22日(土) 懐かしの京都に近い琵琶湖畔の「琵琶湖ホテル」に同伴のご夫人6名を含め45名が参集した。恩師池上淳一先生、坂井利之先生のご来臨を賜り、懐かしい思い出話やそれぞれの近況を肴に美酒を酌み交わし、琵琶湖の夕景を眺めながら楽しいひとときを過ごした。  
 翌23日(勤労感謝の日)は観光組とゴルフ組がそれぞれオプショナル行事を楽しんだ。観光組は、世界文化遺産である比叡山延暦寺で琵琶湖の紅葉を愉しみ「鮎屋の郷」での昼食後、1997年自然豊かな湖南アルプスに誕生した「自然と建物と美術品」「伝統と現代」「東洋と西洋」の融合をテーマとする「M I H O M u s e u

m」を見学し 茶道具、仏教美術、陶磁器、漆工などの日本美術と東世界の古代美術を鑑賞した。  
 ゴルフ組は全米女子プロゴルフ協会公式「2002ミズノクラシック」の舞台となった名門「瀬田ゴルフコース」で快適なプレイを満喫した。  
 真弓 和昭(昭38年卒)記



支部だより

中国支部

50周年記念行事(日帰り旅行)開催

中国支部では、平成15年11月9日(日)に中国支部50周年記念行事として、中国支部としては初めての試みである会員のご家族を交えての日帰り旅行を実施しました。

これまで、中国支部では中国地方に拠点を持っておられる企業を対象とした見学会を実施してきましたが、今回は中国支部50周年記念行事ということで、中国地方をわずかに超えた北九州市の門司区を訪問することとしました。

ご家族同伴ということで、下は2才のお子様から上は〇〇才までの幅広い年齢層の方にご参加いただき、総勢18名となりました。

当日は風が強い日でしたが、幸い雨に遭うこともなく、北九州市の門司区では、観光地として名高い「門司港レトロ地区」の散策、レトロ地区の重要文化財「旧門司三井倶楽部」での昼食、そして、平成15年春オープンしたばかりの、関門海峡をテーマとした文化施設「海峡ドラマシップ」の見学と4時間余りの滞在を参加者全員で楽しく過ごしました。

また、会員の方のご自宅で収穫された「柿」を大量に差し入れていただくなど、皆さまにアットホ

ームな雰囲気の日帰り旅行を楽しんでいただけ、事務局としてもご参加いただいた皆さまに感謝しております。

山本 武司(平4年卒) 記

関西支部

ゴルフ競技会報告

第80回関西支部ゴルフ競技会が平成15年10月19日(日) 武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は、強い風が吹く中、昭和27年卒の松岡茂朗氏を筆頭に、合計24名(うちシニアの部4名)が競技に汗を流しました。結果は次と通りです。

(シニアの部)

- 優勝 山口 淳(S34年卒)
2位 伊藤 俊一(S34年卒)
3位 福川 幸勇(S30年卒)
(一般の部)

- 優勝 吉田 豊彦(S56年卒)
2位 細田純一郎(S36年卒)
3位 金山 慎治(S41年卒)

〔第81回競技会のご案内〕
平成16年5月23日(日)
於 武庫ノ台ゴルフコース
多数のご参加をお待ちしております。

(連絡先)

関西電力

八木 誠(S47年卒)

中山正人(日9年卒)

06・6446・9801

支部総会のお知らせ

平成16年度支部総会は左記に予定されています。詳しくは各支部よりご案内があります。

- 中国支部 5月26日(水)
関西支部 5月29日(土) ホテル京阪(京橋)
北陸支部 6月5日(土)
東京支部 6月12日(土) 白金八芳園
四国支部 6月18日(金)
中部支部 6月26日(土)

本部だより

本部総会のお知らせ

平成16年度本部総会は左記により開催されます。皆様の多数のご参加をお待ち申し上げます。

日時 平成16年5月29日(土)
場所 ホテル京阪・京橋

なお関西支部の皆様には別途詳しくご案内があります。

事務局だより

平成15年度・会費納付状況報告

平成15年度が終了いたしましたので例年どおり、会費納付状況についてご報告いたします。

平成16年2月末現在の会員数は6656名で納付して頂いた会員数は2415名でした。前年に比べて258名減少し、納付率は過去最低の36.2%を記録致しました。

図1に推移を示しましたが、漸減傾向の改善が図れませんでした。

図2は卒業年度別納付状況ですが、やはり前年度に比べて全般に低下しました。会費未納者には4月号以外は会報を送付しない(振込用紙も年1回)のが低下の要因?とも思われ、改善策の早期実施が望まれます。

今後とも皆様のご理解とご協力をお願い致します。

図1. 年度別納付状況

(平成16年2月末現在)

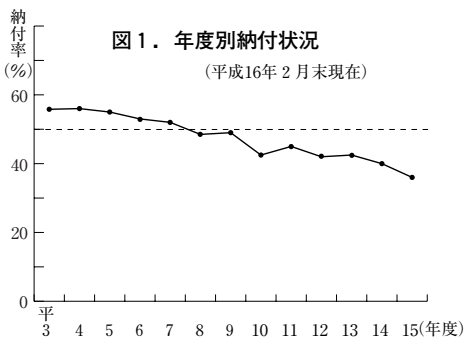
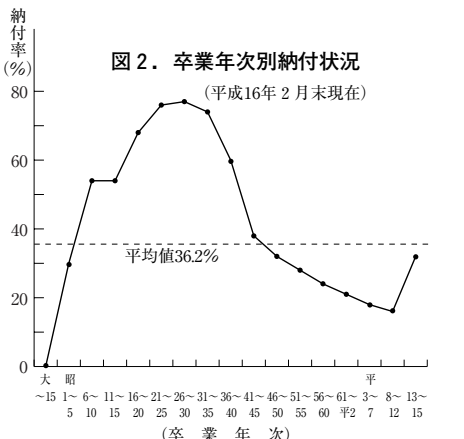


図2. 卒業年度別納付状況

(平成16年2月末現在)



編集後記

本年も桜の開花は例年より一週間も早く、足早に北上中です。

3月は卒業、年度末、4月は新年度で入学、入社、転勤等々人の移動で慌ただしい上に花見客の往来で、京都の街も賑やかな季節です。特に今年2月下旬には、高病原性鳥インフルエンザが感染し、その動向が全国的に注目され、最近やっと沈静化したところで。

本年度も112名の新会員の加入があり、129名が社会人として活躍されることになりました。

事務局 記

計報

Table with 2 columns: Name and numerical data. Includes names like 昭2 真田安夫, 昭9 小原誠, etc.

謹んで哀悼の意を表します。